

満州

満州弥栄村^{いやすか}引揚げの労苦体験

そして再び北海道弥栄の開拓

北海道 小玉 一

はじめに

昭和二十年八月十二日「ソ連軍が満州国内に攻め込んだので、この辺も戦場になるおそれがある。南方ハルビン方面へ一時避難するように」この知らせを受け、三江省樺川県弥栄駅に集まったとき私は十七歳でした。それから五十一年の歳月が過ぎました。生々しくよみがえる少年時代の印象、おぼろ気にしか思い出せない夢のような出来事、過ぎ去りし時々の記憶は定かでは

ありませんが、引揚げ避難の労苦を一緒に味わい引揚げ後は、共に北海道で再び開拓に挑んだ妹の妙、弟・仙二の三人で当時を思い起こし、語り合いながら「海外引揚者が語り継ぐ労苦」の体験記録をまとめることにいたしました。

敗戦から五十一年目の今年、「第二十四回弥栄会総会」が開催されました。時、平成八年五月二十五日。ところ、北海道釧路管内弟子屈町川湯観光ホテル。「彌栄会」とは、昭和七年満州第一次武装移民団として渡満し、弥栄村開拓団と称した村民や関係者が、日本に引き揚げた後に結成した会です。総会は一年一回十五支部が持ち回りで開催し、今年は北海道支部が設営担当となり、春以来準備を進めてきました。当日は全国各地から百十八人の参加を得て、盛会に開催する

ことができました。

この総会に我が小王家は、長男である私・一、^{はじめ}長女・妙、二男・仙二、二女・みち、三男・眞三の兄弟姉妹五人が参加しました。妙は主人小野塚芳一を、松井仙二は妻喜子^{のぶ}をそして菅原眞三は妻道子と、その母フヂエを伴い一族九人が顔を揃えました。小野塚芳一も松井喜子も菅原道子、フヂエも皆弥栄村で暮らした人たちです。言語を絶する満州からの苦難の引揚げ、避難を共にした私たち一族は、当時の労苦を語り合い、今生きていることを喜び、不幸にして異国の地に寂しく眠る亡き人々の冥福を祈るのです。

総会は、はじめに弥栄開拓殉難物故者追悼供養が始まり、満州弥栄村東本願寺御住職故本多賢純先生の御子息本多弘之（東京都台東区今戸、本龍寺住職）導師のもとに読経、焼香が続き、参会者の脳裏には亡き肉親の面影を浮かべたことでしょう。引き続き議案審議、記念撮影そして懇親の宴が始まり、久しぶりの再会に和やかな歓談が続きます。しかし、だれの話の中にも必ずあの引揚げの苦しく悲惨だった事実が、共通の話

題として語られるのは、同じ運命をたどった者同士の心の絆と申せましょう。この弥栄会総会が続く限り、引揚げ避難の労苦は語り継がれていくに違いありません。

この弥栄会総会は回を重ねて今年が二十四回目になります。昭和四十七年東京多摩市桜ヶ丘拓魂公苑に、「弥栄開拓殉難之碑」を建立したのを契機に弥栄同志会を結成、団幹部関係者・団員・奥様たちの出席も多かったのですが、弥栄在満国民学校同窓会が昭和五十五年に結成され、昭和六十一年に同志会と一本化され、弥栄会となってからは、年ごとに二世の出席者が増え、今年も八割近い比率になりました。参加する二世のほとんどが、引揚げの途中で肉親を失っていると申しても過言ではありません。それ故に、亡き人をしのび追悼法要で涙し冥福を祈り、平和を強く訴えるのです。

引揚げのときの父の年齢をはるかに越えた私や、女一人で我が子を守り引き揚げてきた母親…、今のばあちゃんたちの年齢を既に通り越した二世の御婦人たち、それぞれに当時の父母の労苦を痛いほどに身にかけて

いるだけに、決して忘れはしません。繪会に参加することによって、忘れかけた戦争の忌まわしさを思い起こし、平和の尊さを改めて認識する意義ある集いになればと願っております。

渡満の動機と家族状況

私たちの父小玉弥七は、明治三十二年新潟県北魚沼郡湯之谷村の農家に生まれ、兄弟七人の末っ子で育った。魚沼郡と言えば今では「魚沼コシヒカリ」の産地として有名ですが、そのころは五反百姓と言われるほどに、農家の経営・経済は決して豊かではなかったようです。地元の小学、高等科を卒業後家業を手伝い、大正七年陸軍高田三十連隊に入隊、翌八年シベリア出兵によりソ連領シベリア地方に進駐、帰国後、満州除隊となり郷里に戻り、消防署勤務や代用教員として生徒を教えたり、いろいろな仕事に就いたようでした。

大正十年ごろ、軍隊時代同年兵で無二の親友だった新潟県栃尾市の栗林兵七さんと交際が始まり、大工の仕事を手伝うことになったが、元來器用だった父は見よう見まねで仕事を覚え重宝がられたそうです。更に

栗林さんの大工の兄弟子にあたり、栗林さんの姪と結婚していた長岡市の小野塚芳三さんとも知り合うこととなり、三人で仕事をするようになった父は、栃尾市に居を構えました。この栗林さん、小野塚さんは長岡市の宮大工福井棟梁の弟子で、新潟県内各地の神社仏閣の建築に携わったので、父もこの仲間に加えてもらって働いたそうです。後年、父が神社やお寺の建築にかかわった原点はここにあり、栗林・小野塚のお二人とのつながりからだと思います。

大正十二年関東大震災の直後には、復興工事に三人で東京に出掛け、日夜働いたと聞かされました。しかし昭和に入り不況の時代となった昭和七年、満州開拓が国策によって進められることになり、武装移民団の募集があった。農村に生まれ育ち、「農」に執着があった父は応募の意志を固め、早速、栗林さんに相談したそうです。シベリア出兵の折に目にした、シベリア・中国東北地区の広大な大地が脳裏に浮かび、満州に渡る決意で栗林さんと共に応募したのです。それから三年後、昭和十年には小野塚さんも弥栄村に赴き、再び

三人でトリオを組んで仕事をするようになったようです。

父が昭和七年に渡満したとき、私は四歳、妹・妙は二歳、弟・仙二はまだ母の腹の中でした。二年遅れて昭和九年秋、私たち母子四人は家族召致で渡満したが、その時のことは幼くてわかりません。

心にいつも先を求めた父にとって、あの広大な満州の地で雄大な夢を実現できることを信じ、是が非でも満州に行くぞ…と決心して赴いたのでしょう。昭和七年秋渡満後、父は生来の物おじしない性格と親分肌の気性を評価され、弥栄村農業建築組合の初代組合長に推され、団本部近くの住居で家族と共に暮らしました。神社・組合・東本願寺など多くの建築を手掛け、新潟県、山形県などから次々と大工を招き、組合は大勢の職人で活気に溢れておりました。

このころ、父は組合の工事関係で佳木斯じやむすに頻繁に出張で出向いていました。父が不在でも我が家には絶えず人の出入りが激しく、山崎団長さんや組合幹部の人たち、時にはならず者風の者が泊まったりで、常に人

がたむろしておりました。母はその来客や宿泊客の対応、食事の世話などで、気の毒なほど苦労していたことを子供心に覚えている。とにかく父は多くの人のとの交際の輪が広く、あの東宮先生も弥栄にこられると泊まられたし、山崎団長さんや本多先生も風呂に入りこられました。なにかと話題に事欠かない行動派の父の性格は、弟の仙二が受け継いでいるし、姉御肌で世話ずきの母の性格は、妹の妙がよく似ているようです。

昭和十五年から十六年にかけて、弥栄村公所の助役に選任された父の勤務状態は型破りで、村中の話題になったようです。そして十六年秋に退任し、一家は太平屯の農場に移り住むことになりました。

新潟屯から昭和十四年に分進して太平屯に移転した人は、我が家を含め五戸でした。太平屯の農場は父の甥になる星さん、父の大工の友小野塚さんから「昔の習わしだが、従弟制度の年季奉公で、他人の飯を食わせてほしい」と徴兵検査までの約束で預かった長男の芳一さんの二人が、満州人を使って耕作をしておりました。父の理念は「自分が団や組合の役職に就いても、

土地を全部満州人に小作させることはしない。家族の労働力で耕作する。これが開拓農民の基本だ」と最後まで貫こうとしておりました。

終戦前の状況

昭和十八年三月、弥栄国民学校高等科を卒業した私は、そのまま家業に従事した。そのころ、我が家には三人の同居人がおり、父の甥・星さん（二十八歳）、

小野塚さんから預かった芳一さん（十七歳）、親戚の子恭而さん（十六歳）が同じ屋根の下で暮らしていました。星さんは野菜類の栽培を担当、トマト・西瓜などを佳木斯へ出荷販売して収益をあげ、ほかの基幹作物は芳一さんが先頭に立って肥培管理しており、農繁期には臨時に農夫を雇い、私や恭而さんも一緒に働きました。このころの家族は父、母、私、妹二人、弟四人、同居人三人、そして父の義姉（父の亡兄の妻）とその孫娘の総勢十四人の大家族でした。

経営面積は約二十町歩の畑と補充入植者として、認可された小野塚さんの土地の一部を借りし、主に小麦・大豆・玉蜀黍・高粱などを栽培、自家用水田も作付け

しておりました。除草の最多忙期には鋤耨一本持って稼ぎ歩く農夫を十人ほど雇い、炎天下の過酷な作業であり、中耕培土作業は馬を使うため、蛇の少ない夕刻から翌朝までの徹夜作業で大変でした。秋には収穫、脱穀そして供出と続き、大豆の出荷は弥栄組合倉庫の広場に設けたアンペラ囲いの野積集荷場に、足場板の上を麻袋を担いで上った苦勞を思い出します。

家畜は日本馬二頭を飼育、満馬、役牛は中国人に委託飼養し、めん羊、鶏なども家庭消費を充たすため、それなりの数を飼育していました。乳牛は二頭搾乳しており、家族や雇人などで消費し、残りは弥栄牛乳処理所に出荷したが、この持ち込みは専ら妹の妙が登校時に背負ったの役目でした。

昭和十九年に入ると恭而さんが新潟に帰り、夏には星さんが召集され南方戦線に向かい、そして芳一さんも十一月にソ満国境の牡丹江省綏西の部隊に入隊し、若者は私一人となり、常々父が願っていた「耕作は他人に任せず、我が家の労働力でやる」ことも、満州人常雇の労働力に頼り一部を小作に任せる方式に転換せ

ざるを得なくなりました。

昭和二十年の正月を過ぎたころから「日本は戦争に負けるぞ」と満州人に言われるようになり、「まさか：日本が負けるはずはない」と思いつつも不安でした。

終戦直前から避難引揚げの道

昭和二十年八月の初め、村公所から「牡丹江の部隊に入隊するように」との指示があり、いよいよ私のように兵歴のない少年も戦線に行くようになったのかと覚悟しました。いわゆる根こそぎ動員で、隣家の赤沢さんも一緒でした。送別会を催してもらい、八月十日弥栄駅に集合したところ、警察の兵事係に「君はまだ行く必要はない。何かの間違いだから帰ってよろしい」と言われ、訳のわからぬまま帰宅したが、今思えば命拾いしたことになるのかもしれない。

八月十一日村公所で、「弥栄村の今後の対策や引揚げについて」会議が開かれ、出席した父が夜おそく雨の降る中を帰宅し、早速「明十二日朝六時までに、当座の食糧・衣類・防寒具などを携行して、弥栄駅に全

員集合するように」という会議の結論を、太平屯内の五戸に連絡をして回りました。我が家では直ちに雇いの満州人呼び集め「ソ連と戦争のため、一時避難するがまた戻るから」と事情を説明し、衣類や家財道具など売却できる物を処分換金した。当時家族は十一人、ほとんど寝ずに身の回りの整理や、持ち出す物の準備で精いっぱい、妹の妙は父に命じられ、隣家の滝沢さん方に手伝いに行きました。滝沢さんの主人は既に召集され、奥さんと子供三人だけでおり、やはり家財道具を満州人に売却処分し換金したそうです。

翌十二日朝早く、雇人の馬車に送られて弥栄駅に到着したが、駅周辺は村内から続々と集まる人で大混雑でした。当時、太平屯は六戸のうち四戸の主人が七月から八月にかけて召集され、男手がなかったため、父は私を伴い部落内の婦女子の世話に努めました。今当時を回想すれば、よくも一夜にしてすべての財産を始末して、駅に集結したと思うが、だれの心の中にも「日本は戦争に負けるのでは…」という予感があったのかもしれない。

待てども列車が到着せず、皆一様にこれから先が不安になり、動揺していました。昼ごろ、我が家の雇人が、鶏肉のから揚げや肉饅頭をたくさん届けにきて「早く帰ってくるように。皆で待っているから」と涙ながらに別れを惜しんで去って行ったが、長い間雇っていた満州人でしたから、心から心配していたのがよくわかりました。

列車は夕方になってようやく到着したが、石炭運搬用の無蓋貨車がほとんどで、太平屯は同じ貨車に割り当てられました。「慌てるな。焦るな」と号令を掛けても我先に乗り込み、乳飲み子を必死に抱く母親、押しもまれて泣き叫ぶ幼子たち、せまい貨車の中にギュウギュウ押しこまれ、身動きとれない有様でした。我が家は一カ所にまとまりましたが、八十歳の伯母を何とか案にしてやりたいと思ってもどうにもなりません。妹の妙は滝沢さんの奥さんが出産間近いので、その介護と子供の世話で大変でした。こうして十三年間住み慣れた弥栄村を後にして、死に臨むかもしれない旅の一步を踏み出しました。

明け方、佳木斯駅に着いたが、暗い中で火の手が見え、明るくなると市街地のあちこちで黒煙が上がり空を覆うのが目に映る。時々大きな爆発音が響き大砲の音かと思ったら、ドラム缶が破裂する音だった。夕方まで待ち再び出発したが、そのころから雨が降り出し、「我々の乗った列車が松花江の鉄橋を渡り終わったら、直ちに軍隊が鉄橋を爆破するそうだ」という話が伝わり、一刻も早く対岸へ渡らねばと気持ちがあせるばかりでした。

無蓋車が雨の降る中を走ったらどうなるか。想像しただけで身の震える思いですが、見る見るうちに頭から濡れねずみ、貨車の中は水浸し、横になることは不可能、すし詰めの中で雨の降り止むのをひたすら念ずるのみでした。男手は限られているので、父や私はあちこちに樺や細い角材を渡して、その上にむしろを掛けたり、横側に毛布を垂らしたりして、なるべく雨を避ける工夫をしたが、とても防ぎきれぬものではなかった。このころから女の人の中に異常な言動が現れはじめ、幼い子を抱いて茫然とする人や意味のわからぬ言

葉を叫ぶ人など、頼りの夫が召集されてしまった妻にとって、悪夢のような旅路だったのでしよう。そして一番恐れていた犠牲者が出たのです。異常と言える貨車の中の状態では、体力の弱い幼子が起こるべくして起きた死という結末でした。この幼子の亡骸は南又駅ホームの看板の下に、さらっと土をかけたまま葬りました。

八月十四日午前南又駅に着き、炊き出しの食事が配給され、男手のない中で当番として受領に行った記憶があります。携行した食糧は雨に濡れ、暑さで蒸れて食べられなくなったりしました。列車は停車したりと自然発車の合図で走り出したりする。晴れた日は、急造の覆いがあるので蒸し暑く、夜になれば身震いするほど気温が低くなるから、幼子たちが風邪や肺炎などの病魔に侵されるのは当然の成り行きだったのです。

八月十六日綏化駅に着き、飛行場格納庫まで引揚者の列が延々と連なりました。荷物を背負い子供の手を引いて、炎天下を疲れに疲れて歩かされたことは、生涯忘れることのできない残酷物語でしょう。私は綏化

に到着すると同時に、弥栄警察署の兵事係だった人に命じられ、食糧や物資などの運搬使役に残され、軍用トラックだと記憶しているが、とにかく荷役として作業しました。若者が数少ないのだから、何から何まで労働力として駆り出されました。その後も収容所の便所作りに、明けても暮れても使役の毎日でした。一時三万人とも言われる避難民が集結したので、その排泄物の処理に頭を悩ませたことであろうが、その施設を作るのに苦労したものでした。

収容所は格納庫と言っていたが整備工場のような建物で、弥栄村の避難民が全部収容できるほどの大きさ・広さであり、冷たいコンクリートの床に、むしろや新聞紙毛布などを敷いての寝床です。八月下旬から九月に入っている夜は気温が下がり、栄養不足の子供たちが次々と倒れるのです。夜になるとあちらこちらでは明るいローソクの明かり、一カ月の綏化の避難生活は悲しみの毎日、毎夜でした。弥栄東本願寺本多先生のお奥様も同じ避難民の中におられ、死者が出るたびにお経をあげ叩ってくださいましたが、一日のうちに数多

くできることもあり、父も詭経して弔いの手伝いをしました。私は毎日のように亡骸を葬る作業に出ましたが、三歳以下の子供のほとんどが倒れたと思います。

そして、この綏化で戦争に負けたことを知らされ、もう弥栄村には戻ることはできないのだと覚悟しました。

九月十五日、南滿に向け更に日本を目指して、再び貨車に乗り込みましたが、今度は普通貨車であったものの、九月二十四日大連に到着するまでの十日間は、地獄を見た思いの避難行でした。駅に到着するたびにソ連兵や満州人暴徒が無理やり扉をこじ開けて押し入り、金や貴重品を要求し、何とか隠しても探し出され略奪されるのでした。戦争に負けた日本人には、腸よわたの煮えくり返る思いの惨めな仕打ちでした。

今、静かに思い起こせばこの十日間の貨車の旅は、引き揚げる中で最も悲惨だったと思っております。車中で亡くなった人を停車時間のわずかな合間に駅のホームの片隅や、線路脇に手早く掘って埋めたり、幼子の亡骸は鉄橋を渡るたびに貨車から下の川の流れに投下

して水葬にしたことが、目に焼きついています。冷たくなった我が子をなかなか手放そうとしない母親が大勢おりました。水葬の役目は私ら男の仕事でしたが、何ともやり切れない気持ちでした。綏化を出発して三日目の車中で、弟の清五が亡くなりました。元氣だったのに発熱し、喉がはれ呼吸困難になり、息を引き取ったのですが、病名は「ジフテリア」と言われました。わずか三歳の短い生涯でしたが、途中の駅のホームの傍らに穴を掘って埋葬しました。

大連には九月二十四日に到着、収容所の実業学校に落ち着いて七日目に、伯母の勝井トメさんが八十歳で亡くなりました。もう少し生きていれば、日本の土を踏むことができたのと思うと気の毒でした。実業学校の裏山へ運び、石塊だらけの山肌やまがはに穴を掘り埋葬しました。大連でも長い避難生活で体力の弱った者が次々と死亡し、父も弔いに苦労していました。裏山に運んで行くと前日埋葬した所が掘り起こされて、死者の着衣がはがされ、丸裸にされていたり、冬は凍った土を十分に掛けることが困難なため、犬が掘り返して手足

がでていたこともあり、さながら絵で見る地獄図でした。

大連の生活は本部からの指示により、主に埠頭の作業に出役し、ソ連船の荷積みでしたが、満州奥地から続々と到着する農産物や建設資材などの荷降ろしと、船積み作業の毎日でした。こんな使役が半年ほど続き、その後は煙草会社に勤めることになり、作業も楽で妹も同じ職場で働くことにより家計の助けになった。同室の半谷さんの奥さんの知人が、終戦前からこの東亜煙草会社に勤務していたそうで、その方のお世話で働くことになったのです。給与は日給のほかに週末にはこの現品支給があり、これを母と弟が街頭で売って換金したり、不良製品が必ず出るのでうまく丸めて持ち出すため、ソ連人の門衛と仲良しになり見逃してもらい、父や小野塚さんには、たばこの不自由はさせませんでした。

父は小野塚・赤沢さんたちとソ連軍の仕事を請け負って毎日働きに通っており、私も小野塚さんとソ連軍兵舎にサウナ室を造りに行った記憶があります。仕事をそ

のものより、なるべく木片を多く作り、帰りに薪にして持ち帰ったものでした。一年数ヶ月の大連の避難生活は、比較的温暖な気候風土のため、北滿で越冬した人たちより恵まれたと申せましょう。

引揚船の入港を一日千秋の思いで待ちわびていた私たちに、帰国命令がでて埠頭に集結したのが十一月九日。しかし、引揚船が待っても待ってもなかなか入港せず、十二月三日引揚船「辰春丸」に乗船する前に、父の親友栗林兵七さんは埠頭の冷たい待合室で「残念だ！残念だ！」と繰り返しながら息を引き取りました。父も小野塚さんも三十年近く共に語らい励まし合ってきた友の死を無念に思い、心から悼んだことでした。十二月八日佐世保上陸。検疫などで数日間も留め置かれて、新潟県堀之内町の母の実家にたどり着いたのは十二月十七日夜、ボタボタと湿った雪の降る中でありました。母の兄やその子たちに出迎えられ、囲炉裏のまわりでねぎらいの言葉を受けながらいただいた食事の美味しかったこと。これでもう逃避の旅は終わったのだと感じました。

私の引揚げ労苦の思い出

(長女) 小野塚 妙

昭和二十年三月、弥栄国民学校高等科を卒業しましたが、当時先生方も召集され、人手不足なので手伝ってほしいと言われ、毎日のように通って低学年生徒の世話や校舎内外の掃除など、つまりは用務員の仕事をしました。

八月十一日夜、避難の連絡を受けると同時に、父の指示で隣家の滝沢さん宅に行き出発の準備の手伝いでした。弥栄駅に集合してからも引き続き滝沢さんの奥さんに付き添い、三人の子供の世話をしましたが、滝沢さんはお腹が大きく、いつお産が始まるかと心配でハラハラしておりました。列車の中の避難状況は兄が書いているように、本当の地獄を見たような気持ちでしたし、十五歳の少女の身には恐ろしさと、恥ずかしさで語ることもできない悪夢のごとき思いました。綏化で滝沢さんは出産しましたが、幸いにも病院が開設され、入院したのでそのお世話をしました。

弥栄村で召集された人たちが戻ってきて、順次、家

族を探しあて、綏化で合流してきましたが、滝沢さんの御主人は帰ってきませんでした。この綏化の病院で滝沢さんの隣の病室に、空襲でケガをして手当てを受けている佳木斯市民の方がおりましたが、片目だけ開け頭から包帯を巻き、肩から腕にかけてもぐるぐる巻き。診察の時に瞼で動いている蛆をピンセットで医者に取り除いてもらう姿を見て、あまりのむごたらしさに目を覆いたくなる気持ちでした。時々便所に連れて行きましたが、幽霊のようによろけて歩く姿は見るに忍びない有様でした。

綏化までは元氣だった弟の清五が、綏化を出発して三日目に車中で死亡しました。高熱を出し食物がのどを通らず呼吸が苦しそうで、薬を飲ませて看病しましたが、ついに息を引きとりました。わずか二日の病気との闘いでしたから肥えたままの死に顔は、いつもの元氣なときの顔でした。停車した大きな駅の線路の傍らに穴を掘り埋葬しましたが、今でもかわいそうなことだったと祈っております。

綏化から大連までの車中、貨車の中が蒸し暑いので

水が欲しくなり、扉を開けるとソ連兵や満州人が入り込み、お金や貴重品を奪うのです。度重なり最後には奪われる物もなくなりましたが、小野塚さんは立派な時計を強奪されました。ソ連兵が一番悪質で、私たちがお金や時計を隠す場所をすっかり覚えて「ダワイ、ダワイ」と叫びながら、帽子の裏側や靴の中を探って奪うのです。満州人は水売りにきましたが、金と引換えでなければ絶対渡してくれず、これ見よがしの取引で、金のない人は本当にも哀れなことです。十五歳の私と二歳年上のイミ子さん（小野塚さんの娘さん）の少女期の二人には、十日間にわたる緩化・大連間の引揚げの旅は身も心も細る思いで、無事大連にたどり着いたときは、ホッとしました。

大連では最初埠頭へ働きに行き、ソ連軍の使役で貨車からの荷降ろし、そして船積み物の農産物や資材のチェック、数の確認の仕事でした。後に兄と共に東亜煙草会社に勤め、仕事は安定し作業も楽でした。ただ埠頭の使役も煙草会社の仕事も退所時の身体検査は相手がソ連兵であっただけに、女性として本当に恐ろしさと恥

ずかしさで、一番嫌な思い出として残っており、想像しただけで身震いが起きます。これが私の避難引揚げの労苦談です。

私の引揚げ避難の道

(二男) 松井 仙二

私は終戦の時十二歳でした。一晚中寝ずに家の中を片付けたり、満人が集まっていると父母と話し合っていたことを覚えています。弥栄駅に集まったときに友達と「どこに行くのかなあ、皆が一緒に行ければよいなあ」と、半ば「まだ見たこともない所へ行く」期待感があったことも事実です。佳木斯の空が黒煙で薄暗く、時々赤い火が見え恐ろしさが身に迫りました。屋根のない貨車に乗せられ、雨に降られてビショぬれになり、寒くて震えたことや、食べる物がなく、ひもじい思いをしたことなど、これからも決して忘れることのない引揚げの労苦です。

緩化の格納庫の中で友達が毎日のように死んで、父がお経をあげ弔うためにあちらこちらに出掛けていま

した。綏化まで元気だった弟が、綏化から大連に向かう貨車の中で急に様子が変わり、母が「清五、清五、苦しいか！」と必死に看病をしていたが、悲しいことに亡くなりました。家族十一人のうち、ついに一人が欠けてしまい、友達の死を見た悲しさとは違ふ心の底からの涙の溢れる悲しみを感じました。貨車の中で父が読経して弔い、満州のどこか名も忘れた駅の線路の脇に埋めてきました。弟よ、御免なさい。

大連で過ごした一年余りの生活は、十二歳の私にとつて本当に苦しかった。この一語に尽きます。生きるため、食べるために親元から離され、一人で金州の福祥農園という果樹園に働きに行かされた。日本軍の兵士のような二人と一緒に住み、掃除・洗濯・雑用の毎日、養ってもらっただけで、給与は受けていなかったようでした。農園の管理者はソ連兵で、時々顔を見せていた。見知らぬ所で一人ぼっちで過ごす毎日が、とても心細くつらいことでした。

秋のリンゴの収穫が終わり、ようやく父母の元へ戻り、引揚船に乗るまで母と共にタバコ売り、鮎売りを

して家計を助けました。時々満州人の少年に、ポケットにいった売上金を引たくられて、悔しい！情けない！と思ったが、手向かえば袋叩きにされてしまう敗戦国民の惨めさが身にしみました。幸いにも残留孤児になることもなく、生きて日本の土を踏むことができたのが何よりの救いです。

少年の心に残した引揚げ避難という傷は、私が生きてきた六十数年のうちの極めて限られたわずか一年数カ月ですが、生涯忘れることのない深いものです。子孫孫までこの悲惨さを語り継ぐ責任・任務があると信じています。

引揚後再び弥栄開拓に挑む

昭和二十一年十二月、郷里新潟に引揚げ、落ち着いたものの、日本全国食糧難の時代で、いかに母親の実家でもいつまでも厄介になっているわけにもいかず、父の親戚が兵庫県西宮市の山手の方で炭焼をしていたので、父、私、仙二の三人で働きに行った。母や弟妹たちは母の実家で世話になっていました。

そのうちに、弥栄村同志の人たちが「北海道で再び

「開拓をやるう」という話になり、父も賛同し、昭和二十二年四月単身で北海道釧路原野に赴きました。集団で入植可能地として選定された釧路管内標茶町に、新潟県出身者六人を含め三十数人が第一陣として開拓の鎌をおろしました。満州弥栄村開拓団にちなみ「弥栄」の名を、地区名や開拓農協名に冠し、理想郷建設に挑みました。同年八月引揚げの苦勞がたたり母が病気で死没。北海道から父が一時帰郷し家族会議の結果、全員揃って北海道へ行くことを決心し、九月下旬標茶町に着いた。そして父と一緒に入植していた小野塚芳一さん、栗林兵七さんの長男健一さんと再会したのです。

翌二十三年弥栄開拓農業共同組合が設立され、父は初代組合長に就任し、家のことは二十歳になった私と弟が経営することになりました。開拓の初期は荒地を拓くことから始まり、立ち木を伐採しその原木で木炭を焼き、農協に出荷し生活を支え、開畑は一畝一畝人力で起こし馬鈴薯・そば・南瓜などを作付けし、まず食糧自給態勢を確保しました。釧路原野は「不毛の地」と言われていた所で、栽培作物も限られ度重なる冷害

に大きな被害を受け、開拓を断念し離農する者もありました。入植以来十年の間に見舞われた試練…冷害、地震などに耐え、紅余曲折があつてようやく專業農家に到達しました。あの満州弥栄村で夢見た理想郷建設は敗戦と共に崩壊したが、今私たち三人はそれぞれの立場や家庭で第二の弥栄村建設に努力しているところです。二度の開拓に挑んだ父も昭和四十五年七十二歳で亡くなりました。

我が小玉家は、長男の私が継いで酪農專業です。昭和三十一年に結婚しましたが、妻は満州東安省第五次黒台開拓団出身で引揚げ避難の体験をしております。現在の経営状況は乳牛百二十頭飼育、生産乳量四百八十トン、耕地面積六十町歩。

妹の妙はめぐり合わせと申しましょうか、満州弥栄村で我が家の農業の先頭に立って働いていた芳一さんと、昭和二十四年結婚しました。現在の経営状況は乳牛八十頭飼育、生産乳量三百トン、耕地面積四十五町歩、少数精鋭主義で優秀な乳牛が多く、乳牛共進会で大活躍をしています。

弟仙二は樺太引揚者の松井家に養子に入り、昭和三十三年菅野喜子さんと結婚。喜子さんは弥栄村農産加工所主任菅野喜久雄さんの長女です。現在の経営状況は乳牛を百五十頭飼育、生産乳量五百二十トン、耕地面積八十町歩で最新式ミルクングパーラー方式で大型経営です。

三男眞三は、弥栄村岩手屯菅原フヂエさんの娘道子さんと結婚し、菅原姓を名乗り現在厚岸町役場に勤務しています。

二女みち、四男拓の二人は大阪でそれぞれ生活しており、長男、長女、次男の三人が弥栄地区で再びの開拓に精進し、今や酪農郷の夢をかなえつつあるところ です。

【執筆者の横顔】

執筆者の三人は故小玉弥七さんの長男、長女、次男である。第一次武装移民に応募された多くの方は独身者であったのに、小玉さんは満州開拓の情熱をもって、妻子を残して応募され渡満した。

小玉さんは弥栄村農業建築組合長として、弥栄神社、東本願寺を始め、数多くの建築を手がけ大きな功績を残した。また、強固な精神の持ち主で、満州開拓の本旨を唱え、初代弥栄村助役として活躍、村の有力な指導者の一人であった。

子供さんたちは弥栄小学校にて学校教育を受け、家庭では開拓農民として勤務の大切なこと、小事に拘泥しない包容する心などの薫陶を受けた。

無念にも日本の敗戦により開拓村『弥栄』はつぶれ、すべての財産を失い、悲惨な引揚げ避難を経て祖国にたどり着いた。

そして、六人の子供と共にあの広大な満州を思わせる釧根原野を開拓し、再び弥栄村建設に生命をかけた。不毛の地を弥栄村の同志と共に開拓する心意気は、まさに第一次武装移民として北満の地に鉄をおろした信念を彷彿させるものであった。

想像を絶する苦難を大陸にて培った不撓不屈の精神をもって克服し、開拓に成功した。

二世の方は、その事業を発展させ、目下大型酪農を

経営している。ご一族は地域発展に積極的に奉仕、活躍されるなどなど、小玉翁の精神が立派に継承されている。

殊に長女、妙さんのご主人の小野塚芳一さんは誠実で多くの役職に就かれた。弥栄会にも長年にわたり北海道支部長と弥栄会副会長として、慰霊と親睦団結に努力され、最近には総会資料編集など重要な責務を引受けてくださっている。

なお、昭和六十三年、小野塚さんが団長として弥栄小学校同窓の有志と共に、元弥栄村（現孟家岡）を訪ね友好に努め、弥栄及び引揚げの道をたどって慰霊の旅をされた。

平成六年八月には小玉一さんが団長となり北海道と黒龍江省との間に結ばれた友好提携展示事業に基づく訪中団に参加し、更に孟家岡を訪ねて現地の小学校と標茶の弥栄小学校との文化交流、表敬訪問をされた。松井さんは翌年、団長として再び弥栄村を訪ね、前年に引き続き友好を続け、その旅に小玉・松井夫人も同行された。

平成八年には更に一步前進し、標茶町弥栄小学校児童（五・六年生）八人が校長先生、担任教師二人に引率され、地域振興会長同行により元弥栄小学校を表敬訪問された。

当時お世話になった元弥栄村の方々と過去のことをお互いに反省し、今後友好を深め、文化経済の交流などに努力していることを付記する。

（弥栄会長 藤巻 禮四郎）

忌まわしき戦禍、引揚げの途

北海道 荒木直哉

私は明治三十九年八月二十三日山形県西村山郡川土居村（現在西川町）で出生しました。生家は半農半雑仕事で、父は建具職や屋根の茅葺き職などの雑仕事を請け負ってやっていた。

父が日露戦争当時兵役にあって、満州へ出兵の命令が下り、朝鮮に渡り満州を目指したが、たまたま仁川